

## エトルスキ語の数詞を巡る諸問題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平田, 隆一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24090">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24090</a>

論文

## エトルスキ語の数詞を巡る諸問題

平田 隆一

序論

- I. 「サイコロ問題」—1~6の数詞を巡る諸問題
  - II. 1~6以外の数詞を巡る諸問題
- 小括

序論

エトルスキ語の1~10の数詞を巡ってこれまでさまざまな仮説が提示されてきたが、現在確定しているのは、 $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$ がこの順序で1, 2, 3を表すこと、 $hu\theta$ ,  $ma\chi$ ,  $\sigma a$ がそれぞれ4か5か6を意味すること、そして  $sem\varphi$ ,  $cezp$ ,  $nur\varphi$ が7, 8, 9のいずれかに該当することであり、また  $\acute{s}ar$ が10を表すこともほぼ確実と見られる。現在最大の争点となっているのは、4を表す数詞が  $hu\theta$ なのか  $\sigma a$ なのかであり、前者の場合1~6の数詞は  $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$ ,  $hu\theta$ ,  $ma\chi$ ,  $\sigma a$ と並び(以下H4説と称する)<sup>(1)</sup>、後者の場合には  $hu\theta$ と  $\sigma a$ が入れ替わって  $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$ ,  $\sigma a$ ,  $ma\chi$ ,  $hu\theta$ となる(以下S4説)<sup>(2)</sup>。また  $\sigma a$ と  $hu\theta$ は4か6のどちらかとする立場もある<sup>(3)</sup>(い

<sup>(1)</sup> H.L. Stoltenberg, Die Bedeutung der etruskischen Zahlnamen, in: *Glotta*, 30 (1943), p. 234ff.; id., *Etruskische Seinsformen und Sachen*, Leverkusen 1959 (=Sachen), p. 8ff.; K. Olzscha, Etruskisch  $\theta u$  „eins“ und indogermanisch  $du$ - $\acute{o}$  „zwei“, in: *IF*, 73 (1968), p. 151f.; id., in: *Glotta*, 47 (1969), p. 319; M. Lejeune, Les six premiers numéraux étrusques, *Revue des Études Latines*, 59 (1981), p. 69-77 および *Annex. Notice rédigée par M. Lejeune pour le ThLE II*, in: G. van Heems, Lire, écrire, compter: Quelques réflexions et hypothèses sur le système numeral étrusque en marge des travaux de Michel Lejeune, in: *Actes des journées d'études organisées à l'Université Lumière Lyon 2*, 2009, p. 308-314; C. de Palma, *La Tirrenia antica. Storia e civiltà degli etruschi*, I-II, Firenze 1983, I, p. 79f., II, p. 518; M. Pallottino, *Etruscologia*<sup>2</sup>, Milano 1984, p. 48, 65, 509, 514 (多少ためらいがち) = マッシモ・パロッティノーノ著 / 小川熙訳『エトルリア学』同成社(2014), p. 361f.; D. Briquel, *La civilisation étrusque*, Fayard 1999, p. 45; ドミニク・ブリケル著・平田隆一監修 / 齊藤かぐみ訳『エトルリア人—ローマの先住民族 起源・文明・言語』白水社(2009), p. 125 (=Les Étrusques, Paris 2005); K. Wylin, *Il verbo etrusco. Ricerca morfosintattica delle forme usate in funzione verbale*, Roma 2000, p. 127, 163, n. 407, p. 164, 171, 175ff., n. 441, p. 180, 186等。筆者自身は「エトルスキ語の研究—特にその解読法について」『文化』(東北大学) 24-3 (1960), p. 11ff. では  $\sigma a$ ,  $\theta u$ ,  $ci$ ,  $hu\theta$ ,  $zal$ ,  $ma\chi$ を提案したが、その後「エトルスキ語解明の現状—三つの問題を中心に—」, *Spazio*, 7-2 (1976), p. 51ff. および『エトルスキ国制の研究』南窓社(1982) (=『国制』), p. 18ff. でこれを撤回しH4説を支持した。

<sup>(2)</sup> この説は Torp に遡り, Th. Kluge, Die etruskische Zahlwörter. Eine prinzipielle Untersuchung, in: *Studi Etruschi*, IX (1935), p. 153-190 (cf. id., Die etruskische Zahlbegriffe von „eins“ bis „sechs“, in: *Studi Etruschi*, XXVII (1959), p. 311-314) や E. Vetter, Die etruskischen Zahlwörter von eins bis sechs, in: *Die Sprache*, 8 (1962), p. 132ff. に受け継がれ、近年では A.J. Pffiffig, *Die etruskische Sprache. Versuch einer Gesamtdarstellung*, Graz 1969, p. 123ff. (=ES); N. Caffarelli, Avviamento allo studio della lingua etrusca, in: *Archeologia. Scritti in onore di Aldo Neppi Modona*, Firenze 1975, p. 108ff.; A.I. Немировский, *Этрусски. От мифа к истории*, Москва 1983, p. 93; H. Rix, The Etruscan, in: *The Cambridge Encyclopedia of the World's Ancient Languages*, Cambridge, p. 961; G.M. Facchetti, *L'enigma della lingua etrusca*<sup>2</sup>, Roma 2001, p. 288等。

<sup>(3)</sup> G. Bonfante and L. Bonfante, *The Etruscan Language. An Introduction*, Manchester 2002, p. 226; A.I.

ずれの場合でも max は「5」意味する)。この対立する 2 つの説<sup>(4)</sup>の違いは、依拠する資料の違いに起因する。即ち S4 説では、サイコロの向かい合う面に点で記される数は通常 1 と 6, 2 と 5, 3 と 4 が組み合わせられているが、トウスカニア (旧トスカネッラ) で発見された 2 個のサイコロ<sup>(5)</sup>—以下サイコロ A, B と表記する) では各面に数が点ではなく文字で記されていて、その対面同士の単語の組み合わせは  $\theta u : hu\theta$ ,  $zal : max$ ,  $ci : \sigma a$  となっており ( $\sigma a$  は従来  $\acute{s}a$  と表記されてきたが、以下では ET AT 0.14, 0.15 の表記に従う)<sup>(6)</sup>,  $\theta u=1$ ,  $zal=2$ ,  $ci=3$  なので  $\theta u$  と組み合わせられた  $hu\theta$  は 6,  $ci$  と組み合わせられた  $\sigma a$  は 4 を表すと主張される。これに対し S4 説では、タルクイニアの『カルンたちの墓』の壁に 4 人のカルン (冥界の魔神) の姿が描かれているが、その 4 番目のカルン像の脇に  $\chi arun hu\theta s$  (ET Ta 7.81) と記されており、これは疑問の余地なく「4 番目のカルン」 ( $hu\theta$ -s の -s は序数を表す接尾辞) と解釈できるので、 $hu\theta=4$  が成立し<sup>(7)</sup>、またタルクイニアの Aninas 家の墓には 6 基の箱型石棺が安置されているが、その壁面に  $sam : \sigma u\theta i : ceri\chi un[ce]$  (ET Ta 1.153) と書かれていて、これは「そして (-m) sa- (個) の墓 ( $\sigma u\theta i$  ここでは「石棺」の意にとれる) を造った (ceri $\chi un$ ce)」と訳せるので、sa (=  $\sigma a$ ) は間違いなく 6 を意味すると主張される<sup>(8)</sup>。

ところで、サイコロ A および B の各面に 1~6 の数を表す単語がどのような順序で記されたかについて、従来何人かの研究者がその解明に挑んだが、説得的な成果を挙げられなかった。かかる現状に鑑み、本稿はこの「サイコロ問題」にアプローチしてその解決を目指すことを主要な目的とし (I)、また 1~6 以外のエトルスキ語の数詞を巡る諸問題についても我々なりの解決策を提示しようと思う (II)。しかしその前に、 $\theta u=1$ ,  $zal=2$ ,  $ci=3$  という等式が何故間違いなく成り立つと認定されるに至ったのか、コンビナトリ解明法によるその推論について簡単に触れておこう<sup>(9)</sup>。というのも、この等式は今やエトルスキ語数詞の研究にとって不可欠の前提となっており、我々の考察もこの前提に立つて行うことになるからである。

Харсекин, Этрusкая эпиграфика и этрусский язык, in : Немировский, Харсекин, *Этрusки*, Воронеж 1969, p. 56ff.

<sup>(4)</sup> これに対し D.H. Steinbauer, *Neues Handbuch des Etruskischen*, St. Kathariner 1999, p. 430, 435 : 「 $hu\theta$  '5/6' ?」 「 $max$  '4/5' ?」。

<sup>(5)</sup> 現在、これらが発見された場所はヴルチとされている (G. Colonna, *Archeologia dell' età romantica in Etruria : I Campanari di Toscanella e la tomba di Vipinana*, in : *Studi Etruschi*, 46 (1978), p. 117)。

<sup>(6)</sup> ET=H. Rix, *Etruskische Texte. Editio Minor, I, II*, Tübingen 1991.

<sup>(7)</sup> もう一つの証拠として K. Olzscha, in : *IF*, p. 150f. は、ビザンツの Stephanos の語彙集の中の解説「(アッティカの Tetrapolis は) 以前 Hyttenia と呼ばれた」から、 $hu\theta$  と Tetra-polis 「4・ポリス」の一致 (すでに Oštir が指摘した) を挙げる (Stoltenberg も同様)。

<sup>(8)</sup> M. Pallottino, *Un gruppo di nuove iscrizioni tarquiniesi e il problema dei numerali etruschi*, in : *Studi Etruschi*, 32 (1964), p. 117ff.

<sup>(9)</sup> 以下 Stoltenberg, 上記注の諸論稿; J. Wilkins, *Etruscan Numerals*, in : *Transaction of the Philological Society*, 1962, p. 51ff. また拙稿 in : *Spazio*, p. 51ff. および『国制』p. 18ff. 参照。

サイコロ A と B に記された  $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$ ,  $hu\theta$ ,  $max$ ,  $\sigma a$  は、1~6 のいずれかを表すが、これらの6数のうち、最初に挙げた3数にだけ  $-em$  という接尾辞がついた形、即ち  $\theta u-n-em$  (語根  $\theta u$  に  $-n-$  が付加され語幹を形成; Heems (p. 293ff.) によれば  $\theta un-$  は  $\theta u$  の対格),  $e-sl-em$  ( $-sl-$  は  $zal$  の母音が脱落した形), そして  $ci-em$  があり、この接尾辞は引き算を表すと考えられ (ラテン語では、引き算される数は1と2に限られ、例えば  $duo-de-viginti$  は  $-de-$  による引き算 [20-2] で「18」を表す) ので、 $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$  は1, 2, 3のどれかである。このうち  $\theta u$  だけが複数名詞と結びつかないので1を表す。ところで  $ci$  には、他の数詞—  $muv-al\chi$  ( $max$  から派生),  $\sigma e-al\chi$  ( $\sigma a$  から派生),  $sem\phi-al\chi$ ,  $cezp-al\chi$ ) と同様に—  $-al\chi$  による拡大形  $ce-al\chi$  があり、この接尾辞は十の位の数を表示すると考定される。 $zal$  には  $-al\chi$  による拡大形はなく、その十の位の数詞は  $za\theta rum$  という独自の語形を持っているので、20を表すと推定できる。これを証明するのは、神々への奉納の日取りを記述した文書『ミイラの帯』に記載された日付  $hu\theta-is\ za\theta rum-is$  (*ET*, LL VIII 3, XI 15) である。というのは、もし  $za\theta rum=30$  (従って  $zal=3$ ) なら、 $hu\theta$  は間違いなく3より大きな数なので、その日付は33より大きい日にちを表示することになるが、33を超える日付は暦の中に存在しない。故に  $zal=2$ ,  $ci=3$  が成り立つのである。

以上の推論から得られた成果をまとめれば、 $\theta u=1$ ,  $zal=2$ ,  $ci=3$ ,  $za\theta rum=20$ ,  $ceal\chi=30$  は確実と見なされ、また  $\theta unem$ ,  $eslem$ ,  $ciem$  は引き算の形、 $\theta un\acute{s}$ ,  $esals$ ,  $cis$  は接尾辞  $-s/\acute{s}$  による属格形 (?) であり、さらに他の資料から接尾辞  $-z(i)$  を伴った数詞  $\theta unz$ ,  $eslz$ ,  $cizi$  が回数詞であることが判明する。以上の結論はエトルスキ語自体の資料の比較・考察からもたらされたものであるが、かかる結論の妥当性は、エトルスキ語以外の資料即ち3枚の金の薄板に記された銘文 (*ET*, Cr 4,4) により立証された。1964年ピルジで発見されたこれらの薄板の1枚にはポエニ語 (カルタゴ語) が、他の1枚にはエトルスキ語の銘文が刻まれており、両銘文の内容は基本的に同じであることが判明した。ポエニ語銘文中に出てくる  $\acute{S}NT \acute{S}L\acute{S} III$  は「3年」を意味するが、エトルスキ語銘文でこれに対応する個所に記された  $ci\ avil$  は、 $avil$  が「年、歳」を意味することが以前から確定しているので、「3年」と訳すことができ、従って  $ci=3$  はエトルスキ語以外の資料によって絶対的な確実性を得たのである<sup>(10)</sup>。それに伴ってこの等式を導き出した前述の推論の妥当性も認定され、他の諸解釈も正しいことが確認された。

<sup>(10)</sup> これについては平田隆一「ピルジの金の薄板上のエトルスキ語銘文」『古代学』13-2 (1962), p. 133~139; 同「ピルジ出土「金の薄板」エトルスキ語銘文の解明と歴史的背景」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』39 (2005), p. 79-118。

## I. 「サイコロ問題」—1～6の数詞を巡る諸問題

以上の確定事項を踏まえて、 $hu\theta$ と $\sigma a$ のどちらが4なのか6なのかについて考察する。『カルンたちの墓』の碑文が発見される以前におけるH4説の論拠は、ギリシア語以前の言語で $\Upsilon\tau\tau\eta\nu\acute{\iota}\alpha$  (Hyttēnia) と呼ばれる場所が、Tetra-polis「4・ポリス」(tetra-「4」)を意味すると解説する古注におけるhytt-と、問題の $hu\theta$ とが類似していることであった。しかし今やこの語源的解明法に依存せずに、『カルンたちの墓』の銘文によって $hu\theta=4$ は確定視される。また $\sigma a=6$ についても、同じ『アニナス家の墓』の中に問題の碑文と殆ど同じ碑文 $sa\ \acute{\sigma}u\theta i\ cerixunce$ が存在するという問題や、 $sa$ と $\sigma a$ を同一視してもよいのかという問題はある<sup>(11)</sup>けれども、他の諸点を勘案すれば受け入れられよう。実際多くの研究者がこの説を(疑問詞付きの場合もあるが)支持している。しかしながら上述の新資料の発見にも拘わらず、依然として $\sigma a=4$ ,  $hu\theta=6$ 説を信奉するエトルスキ語の専門家もかなり存在する。彼らがこの説に固執する最大の理由は、エトルスキのサイコロの対面同士に点で記される数が通常1と6, 2と5, 3と4という組み合わせになっていることだと思われる。というのは上述の通り、サイコロAおよびBに書かれた単語の組み合わせが $\theta u : hu\theta$ ,  $zal : ma\chi$ ,  $ci : \sigma a$ となっているので、 $\theta u (=1)$ と組み合わせられた $hu\theta$ は6を、 $ci (=3)$ と組み合わせられた $\sigma a$ は4を表すと推定されるからである。ところがAとBはともにかなり大型で象牙製であり、その各面の数は点ではなく、文字で表されているのだ。つまり両者は通常のサイコロではなく、全く例外的なサイコロなのである。従ってこのような例外的なAとBに関して、そこに記された単語の組み合わせが、点で数を示すサイコロの通常の組み合わせ1:6, 2:5, 3:4と同じであるという前提の下に、それらの単語が記された状況を顧慮せずに、各々の数値を決める訳にはいかない。数が文字で記されている以上、これらの文字がAとBの各面に実際にどのように刻まれ、各単語がどんな順序で配列されたのかを入念に観察する実証的な検証が不可欠な所以である。

AとBにおける各文字の書き方と各単語の配列に関する考察は多くの研究者によって行われ、様々の説が提示されてきた。我々の目的はH4説とS4説のどちらが正しいのかを決定することであるが、両説とも $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$ をこの順で1, 2, 3と認定している点で共通しているので、 $\theta u=1$ を出発点とする論考を検討すれば十分だと思われる。しかし問題点をより鮮明にするために、しばしば提唱された $ma\chi=1$ を出発点とする論考<sup>(12)</sup>をも取り上げ、

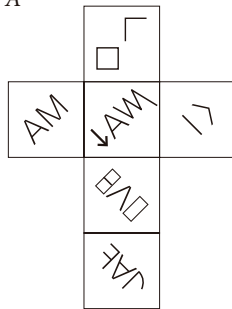
<sup>(11)</sup> 例えばWyllin, p. 178は $\sigma am$ を“et hoc”と訳し、Facchetti, p. 102は“ed <egli>”と解釈する。

<sup>(12)</sup>  $ma\chi=1$ はGoldmann(注13の文献)やKrogmann(注14の文献)の他に、例えばA. Trombetti (*La lingua etrusca*, 1928 Firenze, p. 121)やB. Георгиев (*Исследования по сравнительно-историческому*

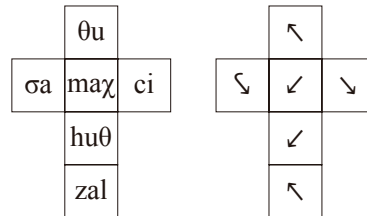
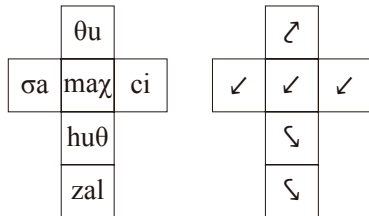
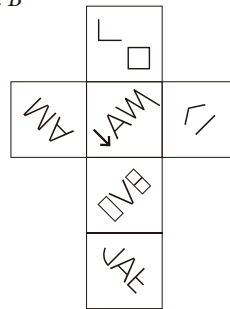
検討の対象をサイコロ問題に関する 1920 年代以降の主な研究者—Goldmann<sup>(13)</sup>, Krogmann<sup>(14)</sup>, Buonamici<sup>(15)</sup>, Slotty<sup>(16)</sup>, Kluge<sup>(17)</sup>—の論考に限定し、彼らの推論の過程を吟味しつつ、まずはその問題点を探り出すことにする。

Goldmann は、「2 個のサイコロは、より上の面で  $\text{max}$  の文字が書かれた方向が同じになるように置かれた場合のみ、相対する面に同じ数が現れる」ので、 $\text{max}$  は 1 を表すという Skutsch 等の主張<sup>(18)</sup> に同調して、サイコロを展開した概念図 (Goldmann A および B = それぞれ p. 186 の左側および右側の図) から  $\text{max}=1$ ,  $\theta\text{u}=2$ ,  $\text{ci}=3$ ,  $\text{hu}\theta=4$ ,  $\sigma\text{a}=5$ ,  $\text{zal}=6$  を導き出した。そこで Goldmann A および B の各単語を上記の順に実際に彫り進んだ場合、サイコロはどのように転回されたのかを検証する (Goldmann A' および B' —それぞれ 2 つの可能性 [①と②] がある)。エトルスキ文字による表記とその読み方、文字の方向は以下の通り<sup>(19)</sup>。

Goldmann A



Goldmann B



языкознанию, 1958, p. 192) によって支持されている。この他に、例えば E. Hrkal (*Beiträge zur etruskischen Sprachfrage*, Wien 1938, p. 5ff.) は  $\text{zal}=1$  を主張する。

<sup>(13)</sup> E. Goldmann, *Beiträge zur Lehre vom indogermanischen Charakter der etruskischen Sprache*, I, Heidelberg 1929, p. 71ff.

<sup>(14)</sup> W. Krogmann, Die etruskischen Zahlwörter von „eins“ bis „sechs“, in: *Glotta* 37 (1958), p. 150ff.

<sup>(15)</sup> G. Buonamici, *Epigrafia etrusca*, Firenze 1932, p. 405ff.

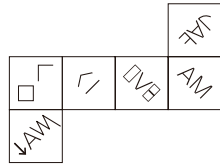
<sup>(16)</sup> F. Slotty, Die etruskischen Zahlwörter, in: *Archiv Orientalní*, 9-3 (1937), p. 379-404.

<sup>(17)</sup> 以下で Kluge 論文は、上記注 2 に挙げた彼の 2 篇の論文の最初のものから引用する。

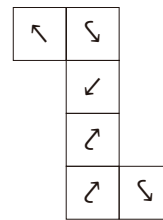
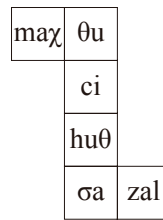
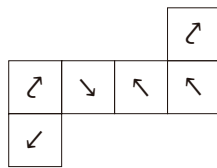
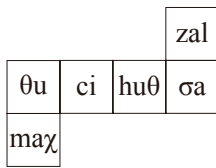
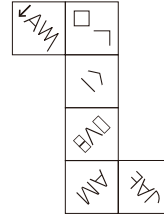
<sup>(18)</sup> Skutsch, s.v. Etrusker, in: *Pauly's-Wissowa, Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, VI 1, Sp. 802.

<sup>(19)</sup> 参考のため、これらのエトルスキ文字の他に、対応するラテン文字およびギリシア文字 ( $\theta, \chi$ ) で右向きに転写した語形と、これらの文字の読み方および発音を併記する。 $\sphericalangle\sphericalangle=\theta\text{u}$ : 発音  $[\text{t}^{\text{h}}\text{u}]$ ;  $\sphericalangle\sphericalangle\text{E}=\text{zal}$ :  $[\text{tsal}]$ ;  $\sphericalangle\sphericalangle=\text{ci}$ :  $[\text{ki}]$ ;  $\sphericalangle\sphericalangle\text{B}=\text{hu}\theta$ :  $[\text{hut}^{\text{h}}]$ ;  $\sphericalangle\sphericalangle\text{M}=\text{max}$ :  $[\text{mak}^{\text{h}}]$ ;  $\text{AM}=\sigma\text{a}$ :  $[\text{ja}]$  また、エトルスキ文字が書かれた方向を矢印  $\sphericalangle$  等で示し、文字が反転している場合には末尾にカギのついた  $\sphericalangle$  等を

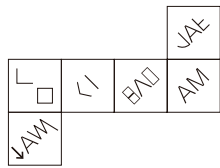
A' ①



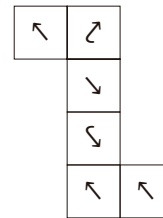
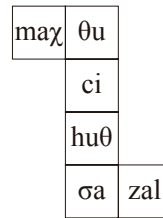
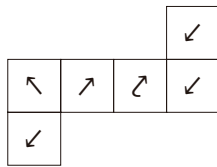
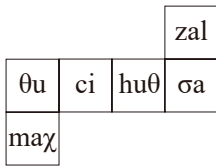
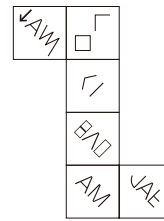
A' ②



B' ①



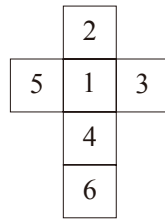
B' ②



見られる通り、反対方向の文字や反転している文字があり、実際にこのような不自然な書き方をしたとはどうも考えられない。μαχ=1 は現在完全に否定されているが、この等式は単語の書き順という視点から見ても成り立たない。

Krogmann も μαχ=1 を中心に据える Goldmann と同一の展開図(上記 Goldmann A, B 参照)に依拠し、これを次頁の図のように解釈する。そのさい彼は対面の数の組み合わせを 1:6, 2:4, 5:3 と想定しつつ、μαχ=1, θu=2, ci=3, huθ=4, σα=5, zal=6 であると論定した。

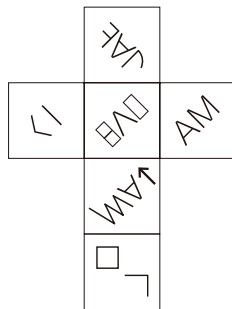
用いる。



Krogmann の場合も Goldman と同様の難点が指摘される。

これに対し Buonamici (p. 407, fig. 1, fig. 2) は, μαχではなく huθを中心とし, サイコロ A と B において huθ が書かれた方向を変えて展開した概念図を挙示する。

Buonamici, fig. 1 (B に相当)



Buonamici, fig. 2 (A に相当)

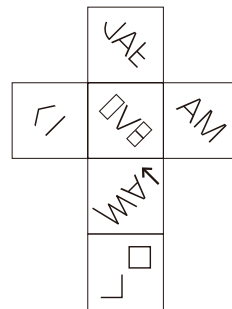


fig. 1 および 2

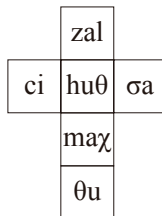


fig. 1

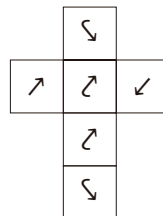
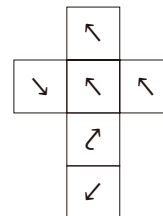


fig. 2

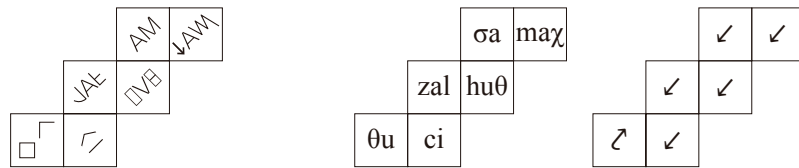


確かにサイコロ A と B の huθ の前後左右に同じ単語が現れるが, それらの文字の方向は異なっている。この結果を受けて Buonamici はこう結論する。「右から左に書く方向を基準にした場合, 何も明らかにはできない。というのは何よりも, これらの単語が対角線上に記されているからであり, そしてまた, 前述のように第 2 のサイコロには, 第 1 のサイコロで用いられた順序との完全な対応がないからである。」しかしながら Buonamici が規準とした左向きの書き方は, 当時のエトルスキ語のごく普通の書き方なので極めて妥当であり, A と B で用いられた順序に完全な対応がないという事実は, 両者の各単語が異なる順序で書かれたことを示唆している。

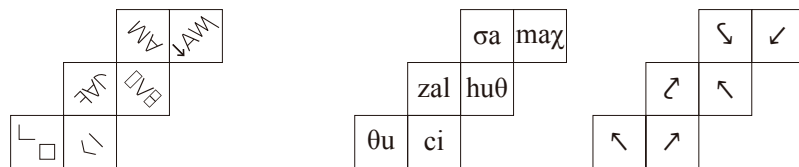


他方,  $\theta u$  を 1 と認定する Slotty (p. 386) は, 1~6 の数詞が  $\theta u, ci, zal, hu\theta, \sigma a, ma\chi$  の順に並び, これらの単語がサイコロ A および B それぞれにおいて, 6-5-4-3-2-1 の順に 1 つの角を軸として面を前方ないし右側に回転させつつ彫り込まれたと主張する。この主張に基づき A と B を展開すると以下の図形が得られる。

Slotty A

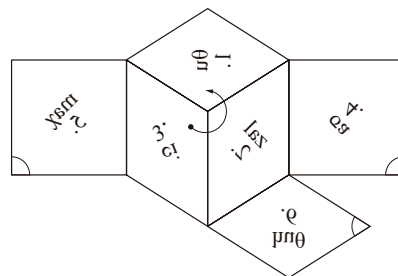


Slotty B

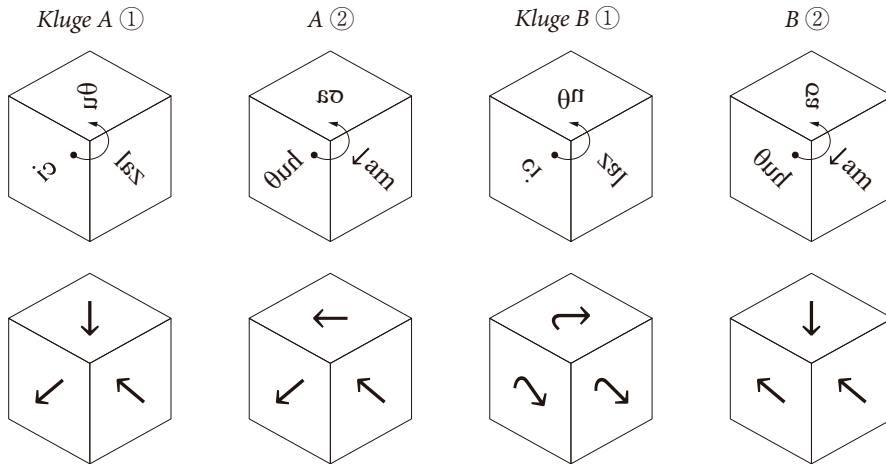


見られる通り, Slotty A においては最後の  $\theta u$  の文字だけが反転し逆方向であるが, Slotty B においては反転や逆方向の文字が入り乱れている。Slotty はその原因について, サイコロ A はサイコロ B を「見本にした」ためと説明するが, いかにも苦しい説明である。実際にこのような書き方をしたとはとうてい考えられず, そもそも彼の設定した数列に問題があったと論定せざるをえない。

次に Kluge は, 数学的な観点からの考察によって次のように主張する。サイコロは 1:6, 2:5, 3:4 の組み合わせで書かれ,  $\theta u, zal, ci$  と  $\sigma a, ma\chi, hu\theta$  は別々のグループをなすが,  $\theta u$  が対角線上に垂直に書かれ, 次に  $zal$  が, それから  $ci$  が反時計回りに星座が回転するように書き込まれた。 $\theta u$  が最初に書かれたので  $\theta u=1$ , その対面に来る  $hu\theta=6$ , 次に  $zal=2$ , 従って  $ma\chi=5$ , それから  $ci=3$ , 従って  $\sigma a=4$  となる—これは現在 H4 説と対立している S4 説に他ならない。彼が挙げている展開図(p. 160)はサイコロ A に相当する次の 1 件だけである。



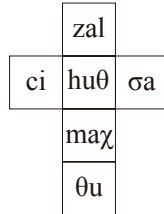
この展開図では ci の文字が自然な書き方（後記 87 頁）から判断すれば反転している。また Kluge が挙げてないサイコロ B では彼の書き方に従えば、 $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$  は反転した状態になる。そこで A と B をそれぞれ  $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$  のグループ①と  $\sigma a$ ,  $max$ ,  $hu\theta$  のグループ②に分けて、彼の図形に則って製図する（A ①の  $ci$  は修正）。



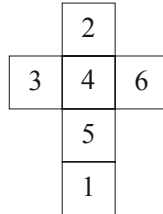
この書き方の最大の難点は、*Kluge B ①*における文字の反転に加えて、サイコロ A も B も  $ci$  から  $\sigma a$  に移るさい面を 1 つ飛び越して書かねばならないことである。サイコロの作成者がこのような矛盾する不自然な書き方をしたかどうか、はなはだ疑問である。かかる不自然さは、A と B における単語の配列に違いがあるのを無視して、両方とも同じ組み合わせであることを前提とし、同じ方法で転回したことに起因するが、同時にまた彼が設定した配列  $\theta u$ ,  $zal$ ,  $ci$ ,  $\sigma a$ ,  $max$ ,  $hu\theta$  が自然数列とは異なっている可能性をも示唆するであろう。

これらの諸説の検討により次のことが判明した。即ち、ある単語を十字架状の展開図の中心に据えたらサイコロ A と B の対応する各面に同じ単語が現れた、という理由でその単語を「1」と同定する論拠とはなりえない。何故なら、両者における各文字が書かれた方向が一致しない以上、それぞれにおける各単語は異なる順序で書かれたのであり、たまたま同一の単語が展開図の中心に置かれたからにすぎないからである。具体的に示せば、*Buonamici* と *Goldmann* の展開図は、十字架の中心に  $hu\theta$  を置くか  $max$  を置くかの違いがあるだけで、サイコロ A と B の各面の単語そのものは同じであるが、次の図から見て取れるように中心に来る単語は必ずしも「1」とは同定できない。それは *Buonamici* の展開図において、例えば H4 説では「4」、S4 説では「6」となり、また *Goldmann* の展開図においては、H4 説および S4 説とともに「5」となるのである。

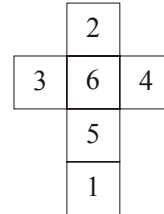
Buonamici の展開図



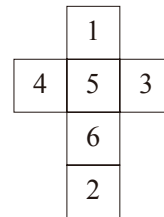
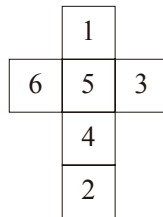
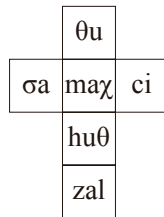
H4 説



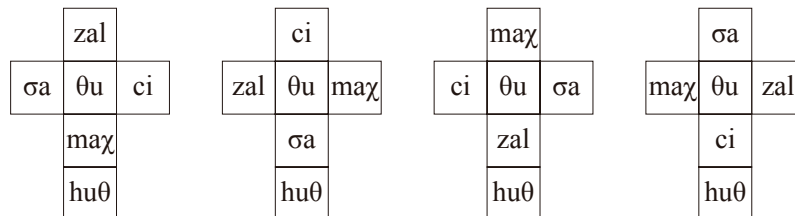
S4 説



Goldmann の展開図



仮に θu を中心においた場合でも、文字を書く方向を度外視しさえすれば、A と B の対応する面に同じ単語が来るような展開図を作成することが可能である—しかもそれは4種類もあるのだ（下図参照）。要するに、十字架状の展開図から各文字が表わす数を決定することはできないのである。

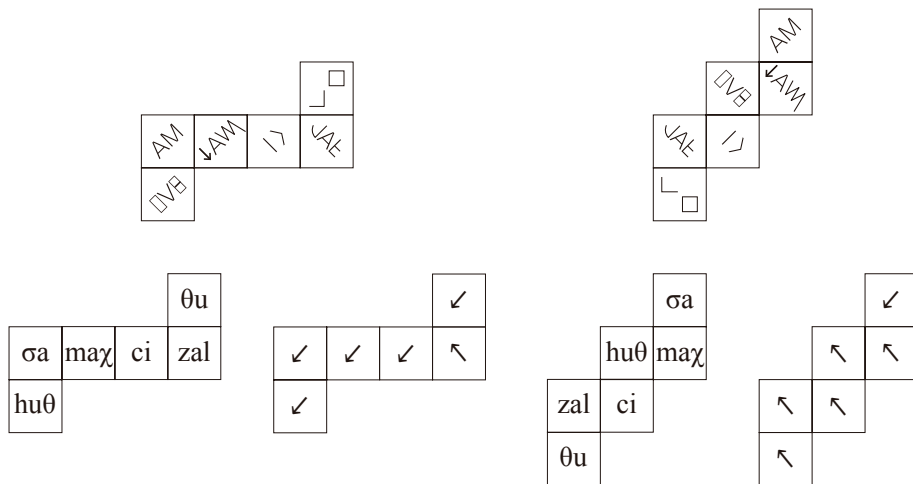


以上のように、サイコロ A および B における各面の単語がどんな順にどのように書かれたかに着目したこれまでの研究は、説得的な成果を挙げることはできなかった。その原因は、1) 単語の書き順は両者とも同じであるという前提に立ったこと、2) 両者とも普通のサイコロとは異なり象牙製で大型であり、点ではなく文字で数が彫り込まれている事実を等閑視したこと、3) そのため、対面する数の組み合わせは点で記された場合と同じはずだと思い込んで単語の配列を考察したこと、である。とはいえ、かかる研究法はそれ自体けっして否認さるべきではなく、問題を未解決のまま放置してはならないであろう。否、むしろこの方法をエトルスキ語数詞に関する現在における知見に照らして活用し、上述の失敗の諸原因を回避しつつ新たな展望を切り開くべきである。

サイコロ A と B の作成者は、これらに文字を彫り込むさいできるだけ自然で書き易い方法を選んだに違いない。しかも A における対面同士の単語の組み合わせと B におけるそれとが一致している ( $\theta u : hu\theta, zal : ma\chi, ci : \sigma a$ ) ので、単語の配列はけっしてアットランダムに行われた（この場合両者が一致する確率は極めて低い）のではなく、それぞれ特定の書き順に従ったと考定しなければならない。最も自然な配列は、1, 2, 3 の順に書き進む方法である。そこで筆者は、 $\theta u, zal, ci$  がこの順で疑問の余地なく 1, 2, 3 を表すという事実を出発点として、この自然数列を文字で刻んだ  $\theta u, zal, ci$  をそれぞれエトルスキ語の通常の書き方に従って反転なしに左向きに次々に彫り進み、それから残りの各文字についても同じ条件で彫り進んだ場合、サイコロ A と B の各単語はどのように配列されるのかを検討した。その結果、各単語が書かれた順序を示す以下の展開図が得られた。しかも上で設定した条件を完全に満たす書き順は、A と B それぞれに一つしかないことが判明した。

Hirata A

Hirata B



何故サイコロの作成者はこのように全く異なる 2 種類の書き方をしたのだろうか。同じものを 2 個作ってもよかつたはずである。そうしなかつたのには、何か特別な理由があつたからに相違ない。

ところで 1, 2, 3 を表す  $\theta u, zal, ci$  をこの順に書き進んだ場合、4, 5, 6 のどれかを表す残りの 3 個の単語  $\sigma a, hu\theta, ma\chi$  は、サイコロ A では  $ma\chi, \sigma a, hu\theta$  と続き、B では  $hu\theta, ma\chi, \sigma a$  と続く。どの単語がどの数を表すのか、A と B それぞれの単語の配列と数列との組み合わせは次の 6 通りある。

	サイコロ A				サイコロ B		
	max	σa	huθ		huθ	max	σa
(1)	4	5	6	———	6	4	5
(2)	4	6	5	———	5	4	6
(3)	5	4	6	———	6	5	4
(4)	5	6	4	———	4	5	6
(5)	6	4	5	———	5	6	4
(6)	6	5	4	———	4	6	5

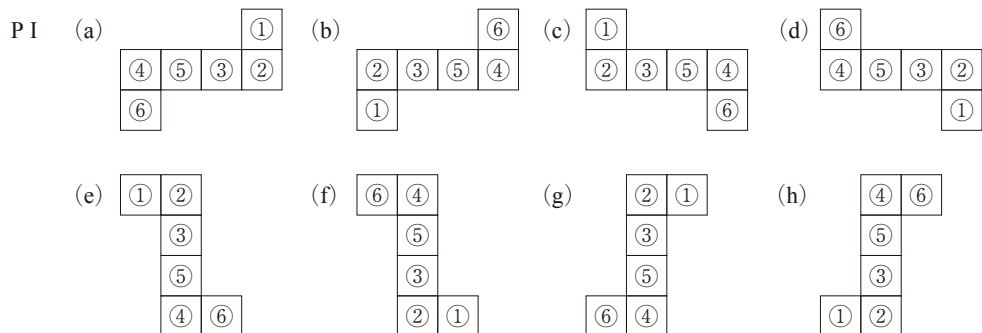
見られるように、A と B が同じ数列を表示することはない。ということは、1~6 を表す単語は A と B で異なる順序で記されたということである。これら 6 通りの数列のうち、前半の数列 1, 2, 3 と併せて完全な自然数列になるのは、A の (1) と B の (4) だけである。

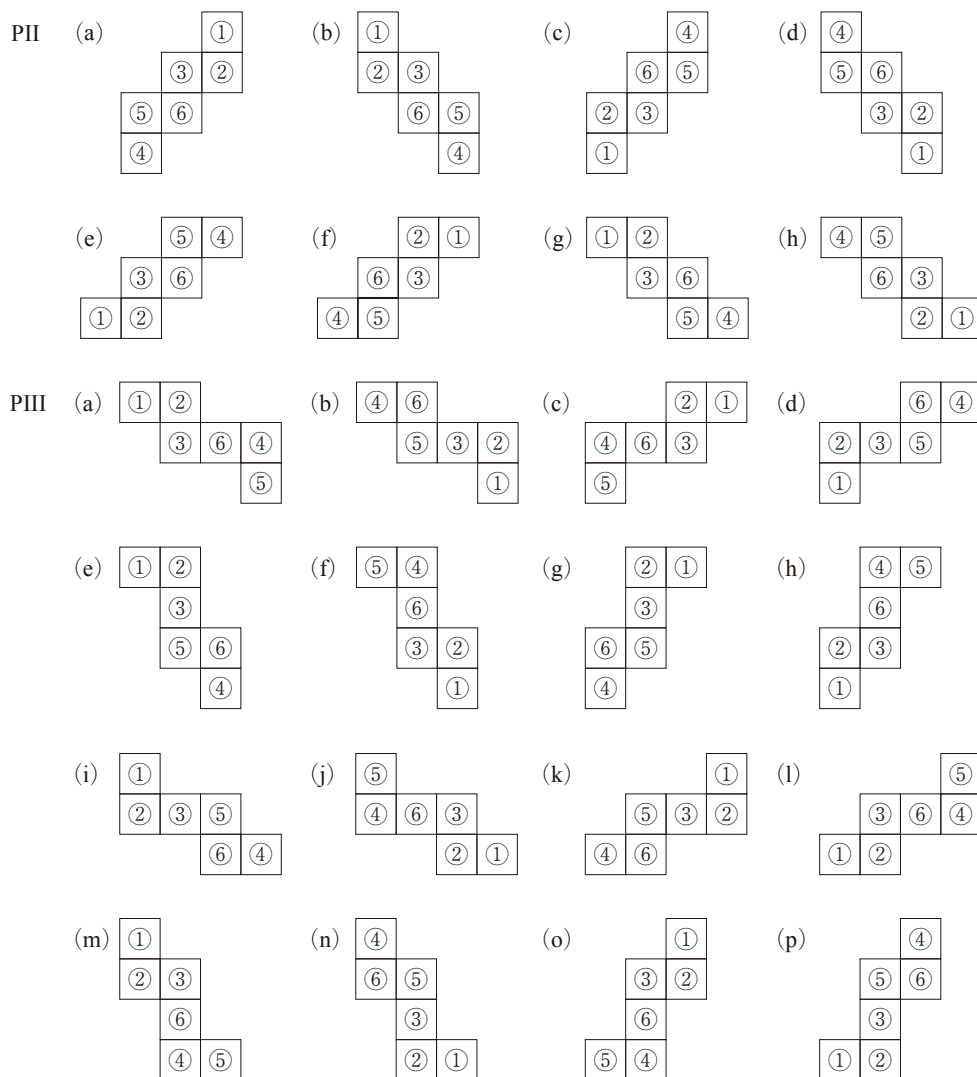
(1) において A の数列が 1, 2, 3, 4, 5, 6 の時、B の数列は 1, 2, 3, 6, 4, 5 となり、max が 4, σa が 5, huθ が 6 を表す (以下で M4 説と称する)。対面同士の数の組み合わせは A も B も 1:6, 2:4, 3:5 となる。

(4) において B の数列が 1, 2, 3, 4, 5, 6 の時、A の数列は 1, 2, 3, 5, 6, 4 となり、huθ が 4, max が 5, σa が 6 を表す (これは H4 説である)。対面同士の数の組み合わせは A も B も 1:4, 2:5, 3:6 となる。

他方 H4 説との間で論争的となっている S4 説は (3) に該当するが、すでに Kluge A, B について論証したように、自然数列 1, 2, 3, 4, 5, 6 を表すことはできない。対面同士の数の組み合わせは A も B も 1:6, 2:5, 3:4 となる。

一体 M4 説と H4 説 (さらに S4 説) のどちらが正しいのだろうか。これを解明するには、そもそも何故 A と B においてこのような異なる書き方が採用されたのかを究明しなければならない。サイコロに数を点で記す場合、対面同士の数を慣用に則り 1:6, 2:5, 3:4 と組み合わせ (S4 説)、自然数列に従って少なくとも 1, 2, 3 を連続して記していけば、サイコロ全般について次の 32 通りの記入法が可能である。(○印の中の数字は賽の目の個数を表す。)





如上の 32 通りの記入法のうち、図形的に限って言えば、つまり文字を書き込むさいのサイコロの転がし方だけを問題にするならば、PI(a) が *Hirata A* と、PII (c) が *Hirata B* と合致する。何故 PI(a) におけるサイコロの転がし方が *Hirata A* のために選ばれ、PII (c) における転がし方が *Hirata B* のために選ばれたのだろうか。

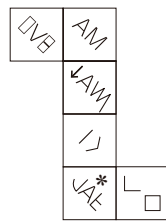
*Hirata A* のために PI(a) の転がし方が選ばれた理由は、サイコロの作成者がこの方式に慣れ親しんでおり、最も彫り易い遣り方だったからだと考えて間違いなからう。というのは、文字で数詞をサイコロに彫り込む場合に最も簡便な方法は、サイコロを前方から右側に転がし、できるだけ連続して各単語を記入する方法だからである。*Hirata A* においては、

θu を彫った後にサイコロを前方に転がし zal を彫り（展開図では θu の下に来る）、次に右側に転がして ci を彫り（展開図では zal の左に来る）、また右側に転がして maχ を、それから σa を彫り、最後に前方に転がして huθ を記入するやり方が採られた。この手順は極めて自然である。

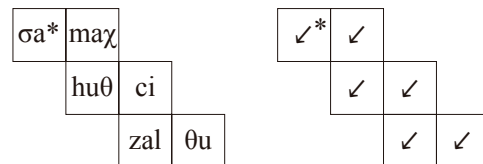
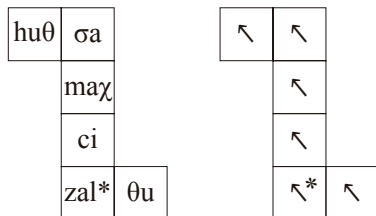
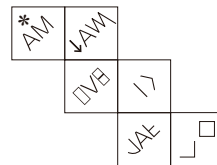
他方 *Hirata B* のために PII(c) の転がし方が選ばれた理由は、それが通常は用いられていない新奇な書き順だったからだと推定される。ここでは θu を後方へ転がして zal を彫り（展開図では θu の上に来る）、次に左側に転がして ci を彫り（展開図では zal の右に来る）、再び後方に転がして huθ を、また左側に転がして maχ を、最後に後方に転がして σa を彫り込む方法が採られた。この手順は *Hirata A* に比べるとかなり複雑で、けっして書き易いとは言えないであろう。しかし実は逆に σa から彫り始めて、前・右・前・右・前へと進めば、ごく自然に各単語を断絶せずに彫り込むことができるのである。

瞳目すべきことに、*Hirata A* において各文字が記された方向は左向きで全部同じであるが、2 番目に記された zal だけは——他の 5 面の文字が右上から左下に向かっているのに対して——右下から左上に向かっている。他方 *Hirata B* においては各文字が彫られた方向は全て左向きで *Hirata A* と同様であるが、これとは対照的に各文字は——右上から左下に記された最後の σa を除き——右下から左上に向かっている。もし A で zal が他と同様に右上から左下に彫られ、かつまた B で σa が他と同じように右下から左上に向かっていたとするならば、全ての文字の上下の向きも一致し、この方が最も自然である。しかしこのように文字の上下の向きを一致させた場合には、サイコロ A と B それぞれにもう一つ別の書き方が可能になる（\*印は上下の向きを変えた文字を表す）。

*Hirata A'*



*Hirata B'*



*Hirata A* においても *B* においても、1 単語の文字の上下の向きがそれぞれの書き順の唯一性を決定する位置で他と異なっていることは、単なる偶然の所産として無視することはできないであろう。ここにサイコロ作成者の強い意志が働いたこと、つまり彼が断固たる意思をもって書き順を上記の2つの方式に限定する操作を行ったことは、容易に見て取れる。一体彼は何を意図したのだろうか。

前述のように、図形的に PI(a) と合致する *Hirata A* には慣用的な手法が適用され、図形的に PII(c) と合致する *Hirata B* には *Hirata A* のそれとは類を異にする斬新な方式が適用されたが、何か新しいことをしてみようという気がなければ、慣用的な手法をそのまま踏襲しても構わなかったはずである。ところが彼は敢えて別な方式をも採用した。その理由は、*Hirata B* の単語の配列を自然数列に合わせようとしたため、と推定される。この推定が正鵠を射ているならば、 $hu\theta=4$ ,  $max=5$ ,  $\sigma a=6$  とする H4 説が正しいということになる。M4 説では  $max=4$ ,  $\sigma a=5$ ,  $hu\theta=6$  となるが、この場合には、何故一方でいわば伝統的な書き順が基盤にある *Hirata A* に 1, 2, 3, 4, 5, 6 という伝統に反するような自然数列を導入し、他方で新奇な書き順を用いた *Hirata B* において 1, 2, 3, 6, 4, 5 という、慣用的な数列 (1, 2, 3, 5, 4, 6) とさして違わない不自然な数列にしたのか、説明がつかないであろう。もし単に自然数列を得ることだけが目的であったならば、同じものを2個作ればよかつたのではないだろうか。これに対し H4 説では、*Hirata A* において伝統性を保持しつつ、1, 2, 3, 5 まで点で記入する場合と同じ配列で文字を彫り進み、革新的な *Hirata B* において例のない 1, 2, 3, 4, 5, 6 という自然数列に基づく書き方を導入したと考える方が理にかなっていると思われる。

そのさい H4 説では、*Hirata B* における対面同士の数の組み合わせは 1:4, 2:5, 3:6 となり、これが *Hirata A* でも用いられている。この組み合わせは、点による記載法 PI(a) において ④ と ⑥ を入れ替えるだけで容易に達成でき、*Hirata A* においても  $max (=5)$  の次に  $\sigma a (=6)$  を、それから  $hu\theta (=4)$  を彫りさえすればよかつたのである。一方 M4 説では、対面同士の数の組み合わせは 1:6, 2:4, 3:5 となる。もしサイコロの作成者が自然さを重視したとすれば、ここでも当然自然さが尊重されたであろう。であるならば、M4 説におけるランダムな組み合わせではなく、H4 説における整然たる組み合わせ——1, 2, 3 と 4, 5, 6 がそれぞれこの順で対になる——が選好されたに相違ない。

その上さらに次のような看過できない事実がある。即ち *Hirata B* では H4 説に従う限り、最後の  $\sigma a (=6)$  の面を左に転がせば、冒頭の  $\theta u (=1)$  がそっくりそのまま現れ、従って再び 1, 2, 3, 4, 5, 6 という自然数列を繰り返すことができ、しかもこれを無限に続けること



が可能なのである。一体これは何を意味するのだろうか。この点について一つの仮説を提示しようと思う。

前述の通り、文字を刻まれた象牙製のサイコロ A, B は、点で数を示す骨製の常用のサイコロよりもはるかに大きい——後者の一辺の長さはたいてい約 1.2 cm, 前者のそれは約 5.5 cm (cf. Slotty, 382f., 386) ——ので、日常生活で遊びに使うには大きすぎる。とすればそれは何か宗教的な目的のためにか、あるいは副葬品として作られたと考えられる。*Hirata A* および *B* における単語の書き順から推察して、副葬品と見なすのが適切であろう。上述のように、*Hirata B* では 1~6 の自然数列が連続してこれが何度でも繰り返されるので、サイコロの作成者はここに何か神秘的なものを感じたのではあるまいか。だとすればこの現象はエトルスキ人が信じた死後の世界における生命の永続性<sup>(20)</sup> を象徴していると把握されるかもしれない。M4 説ではこの数列は 1-2-3-6-4-5 (因みに S4 説では 1-2-3-6-5-4) となり、単語の配列は同じ連続性を示すけれども、かかる数列の繰り返しに上述のような生命の永続性の象徴を窺取することは困難であろう。他方 *Hirata A* における配列は、最後の huθ から途切れずに自然に θu へと書き進むことはできない、即ちそれは 1 回に限定されたものであり、*Hirata B* とは対照的に 1 回限りの現世を象徴すると捉えられるかもしれない。また *Hirata B* における対面同士の数の組み合わせ 1:4, 2:5, 3:6 が、伝統的な書き順を基にした *Hirata A* においても維持されているのは、現世と来世の繋がりを象徴し、故人が永遠の世界においても生前の日常生活におけるのと同様にサイコロ遊びに興じることができるように、という願望を反映していると想像される。

サイコロ A と B の作成者がそれぞれ異なる書き順に固執した理由は、今や明らかである。それは A における伝統性と 1 回性を、B における革新性と永続性と対照させることだった。そしてこの対照が成立しうるのは、*Hirata A* と *Hirata B* を H4 説によって解釈した場合だけである。かくしてサイコロ A と B に彫られた各単語の書き順に関する実証的検証によって、huθ=4, σα=6 が確実視されることが判明した。この結果は『カルンたちの墓』における銘文 χarun huθs 「4 番目のカルン」から得られた huθ=4 と相俟って、H4 説の妥当性を裏付けるであろう。またそれに伴って maχ=5 という等式も確定する。

以上のように 1~6 の数詞が特定され、これと連動して zaθrum=20, cealχ=30, muvalχ=50, oealχ=60 が確定するが、十の位の数について次の点が注目される。即ち ce-alχ, muv-alχ, oe-alχ にはその基になった一の位の数 ci, ma-χ, σα とは違う母音、即ち ci の i に対しては e が、ma-χ の a に対しては u(v) が、σα の a に対しては e が用いられている点である。

<sup>(20)</sup> Cf. A.J. Pfiffig, *Religio Etrusca*, Graz 1975, p. 162ff.

(cealχ には cialχ という語形もあるが、後者は前者より実証例がはるかに少なく、例外と見なしてよかろう。) Lejeune (in: Heems, p. 312) は max から muvalχ の派生は説明できないとする。しかし cealχ や œalχ の事例に徴すれば、max の a が muvalχ で u(v) に変化しても不思議ではない。このように基本形から母音を変えて関連のある他の数詞を派生させる例は、他の言語でも見られる。例えば日本語の 3 とその倍数 6: mi (3) に対し mu (6)、また 4 とその倍数 8: yo (4) に対し ya (8)。似たような現象は、例えばもともと古高ドイツ語の \*zwē の音韻変化の結果生じた現代ドイツ語 zwei~zwölf~zwanzig でも共時的には認められる<sup>(21)</sup>。

ところで huθ (=4) には cealχ 「30」、muvalχ 「50」、œalχ 「60」のように接尾辞 -alχ による形 (\*huθalχ)、あるいは zaθrum (=20) のように接尾辞 -θrum による形 (\*huθrum) が実証されていない。「40」を表す単語が資料中に出てこないというのは、他の十の位の数「30」「50」「60」がそれぞれ複数回、また cezpalχ と semφalχ が 1 回ずつ実証されているのに比べて、いささか奇妙と思われる。それ故「40」は -alχ や -θrum を持たない別の形で表されている可能性が高い。その候補者として huθzar を挙げたい。これは avils huθzars という死亡年齢を示す碑文 (ET, AT 1, 40) の中に現れ、一般に avil-s huθ-zar-s と分析され、avil は間違いなく「年、歳」を意味し、その語尾 -s は時を表す属格・与格ないし所格で、huθ は「4 または 6」を意味し、zar は śar の異形態で「10」を表し、語尾の -s は時を示す属格・与格ないし所格と把握され、全体で「14 または 16 歳で (死去)」と訳されてきた<sup>(22)</sup>。他方 zar=10 という等式は『ミイラの帯』文書に出てくる θucte ciś śariś (ET, LL VIII 1) の解釈から導出された。即ちこの文書では供犠挙行日を表す語句が実証されている<sup>(23)</sup> ので、θucte ciś śariś も日付を表すと考えられ、θucte は月名 (所格?) であり<sup>(24)</sup>、ci-ś の ci- は紛れもなく「3」なので、śar-iś は—zaθrum が「20」である以上—「20」ではありえず「10」を表すに違いない。こうして ci-ś śar-iś は時を表す属格・与格ないし所格語尾をとった形で「13 (日) に」を意味する<sup>(25)</sup>。

以上の huθzar (huθsar) = 「14 または 16」という解釈を導き出した推論は、θucte ci-ś

<sup>(21)</sup> W. Pfeifer, *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen Q-Z*, 1989 Berlin, p. 2049, 2055.

<sup>(22)</sup> Lejeune, p. 313: \*huθs śars の合成語で「14」; Pallottino, *Etruscologia*, p. 509: 「14」?; Piffig, *ES*, p. 129, 290: 「16」; Bonfante, p. 96, 「16」; Steinbauer, p. 463: 「14/16」; Facchetti, p. 288: 「16」。これに対し Stoltenberg, *Sachen*, p. 14: huθs śars の短縮形で「14」、また Slotty, p. 395 は「34」。

<sup>(23)</sup> K. Olzscha, Die Kalenderdaten der Agramer Mumienbinden, *Aegyptus* XXXIX (1959), p. 340ff.

<sup>(24)</sup> Olzscha, *ibid.*, p. 355: 「8 月」; Steinbauer, p. 489: 「6 月」か「8 月」。これに対し Vetter, p. 140 は θucte も celi も月名ではないと主張する。

<sup>(25)</sup> Olzscha, p. 355: “Am 13. August”; Facchetti, p. 275: ci-ś śar-iś iśvite= “in agosto, le idi del tredici”; Steinbauer, p. 338, 489 等。

śar-iś と avil-s huθ-zar-s の語構成上の差異を見落としている。というのは、θucte ci-ś śar-iś において ci-ś śar-iś はそれぞれに接尾辞 -(i)ś が付いていて互いに独立した単語であることを明示している<sup>(26)</sup>。よって ci-ś śar-iś は ci と śar が加算されて「13」(3+10)を表し、ここで -ś は時を表す所格ではなく、序数を示す接尾辞と捉えられ (Cf. ラテン語: tertius decimus), 全体で「13 番目 (の日) に」を意味すると解釈できる。他方 avil-s huθ-zar-s で用いられている数詞は huθzar-s であって huθ-s zar-s ではない、つまり huθ と zar は一体化された単一の語 huθzar であり、接尾辞 -(i)s はこの単語の最後に 1 つだけ付けられたのである。かくして huθ (=4) と zar (śar=10) が一体化した huθzar-s は、両者が加算されて「14」を表すのではなく、一体として、即ち掛け合わせて「40」(4 × 10) を表すと考定すべきである。同じような数詞の構成は、他の言語にも見られる、例えばジョージア語 (グルジア語) で oc-da-otx-i は 20+4 で「24」を、otx-m-oc-i は 4 × 20 で「80」を表す<sup>(27)</sup> (フランス語: vingt-quatre 「20+4」=「24」に対し quatre-vingts 「4 × 20」=「80」も参照)。

如上の推論は墓碑に死亡年齢を記載する書式の違いによって確認される。主な書式は次の 3 種類である。

(1) lupu 型: 死亡年齢が avils. huθs. muvalχls. lupu (ET, Ta 1.183) のように、avil 「年、歳」と huθ muvalχ 「54」に語尾 (-s/-ls) を付けて、lupu 「死亡」もしくは lupuce 「死亡した」とともに記載される (省略されることもある)。

(2) svalce 型: 死亡年齢が svalce avil LII (ET, Ta 1.32) のように、avil と数字だけが何の語尾も付けられずに svalce 「生きた」(まれに svalθas) とともに記載される (avil の確実な 24 例に対し 1 例だけ avils が用いられているが、ET, Ta 1.230 では avil{s} と読み、s の削除を指示している)。

(3) ril 型: 死亡年齢が ril LXXV (ET, Vt 1.107) のように、avil も avils も用いずに数字だけで ril とともに記載される (100 を超える例証のうち avils とともに用いられた事例は 2 件だけで、全くの例外と言ってよい)。

これら 3 種の書式には歴然たる違いが認められるので、何らかの意味上あるいは少なくともニュアンス上の違いが予想される。

書式(1) lupu 型の例文 avils. huθs. muvalχls. lupu は、私見では次のように解釈される。即ち avils の -s は時を表す属格ないし与格語尾、huθ-s の -s は序数を示す接尾辞、muvalχ-l-s の -l- は属格語尾、-s は序数を示す接尾辞であり、従って全体として「54 番目

<sup>(26)</sup> Facchetti, p. 288 は cisar という形を想定し、これを「13」と訳しているが、かかる単語は実証されていない。

<sup>(27)</sup> H. Aronson, *Georgian. A Reading Grammar. Corrected Edition*, Slavica Publishers, 1990, p. 147, 279f.

の年に死亡した」と訳せる。古代においては生まれた年が第1年目となるので、「54番目の年」は実際には満53歳を表す。「数えて54歳」とも言えようが、日本の数え年は誕生日とは無関係なので、厳密な訳語とはならない。ET, Ta 1.14: lupu avils XXV は年数が数字で記されているが, avil-s に付いた語尾 -s と lupu によってこの書式に属することは明白で、数字に語尾は付いてないけれども、これを補って「第25年目に（即ち満24歳で）死去」と翻訳できよう。ET, AT 1.22: avils: XX: tivrs: oas も (lupu は欠落しているが) 同様に把握され, tivr- は間違いなく「月」を意味するので「第20年目, 第6番目の月に（死去）」と訳されよう（つまり実質的には満19歳5か月と数日で死亡ということになる）。

書式(2) svalce 型では、語尾が付いていない avil は「歳, 年」を意味する主格ないし対格であり、従って数字は序数ではなく基数を表す。注目すべきことに、この書式では年齢は殆ど数字で挙示されているが、1例だけ文字で掲示されている事例 ET, Ta 1.82: max cezpalx avil svalce があり、ここでは max cezpalx にも avil にも何の語尾ないし接尾辞が付いてないのである (cezpalx は他所では cezpalxals (ET, Vc 1.93), cezpalxls (ET, Ta 1.83) の形で用いられている—cezpalx=80 については後記98頁)。これはピルジの銘文中の ci avil 「3年間」<sup>(28)</sup> と同様に、経過した年月を表すと考えられる。そして sval-ce 「生き・た」の意味が確実なので<sup>(29)</sup>、この例文は「85年間生きた」即ち「生年85」と訳せる。この書式(2)において avil ではなく avils が用いられたとすれば、「85(番目の)年に生きた」という何か奇妙な表現になってしまうだろう。この点で書式(1)と(2)は基本的に異なるが、混同されて訳されることもある<sup>(30)</sup>。ともあれ ci avil はラテン語の annos tres に, avils cis は anno tertio に相当すると見なしえよう。

書式(3) ril 型は, avil/avils も lupu(ce) も svalce も用いず, ril と数字だけで死亡年齢を掲げている以上, ril の中にすでに「年/歳」「死亡(した)」「生きた」という概念即ち「死亡年齢」ないし「生存年数」が含まれていると考えねばならない。数字は単純に数を示すだけなので, ril は「死亡年齢」よりも「生存年数」を表すと把握できよう。とすればこの単語は「満xx歳」と訳せよう<sup>(31)</sup>。(日本語の「享年」は必ずしも「満xx歳」ではなく数え年の場合もあり, 厳密には ril とは一致しない。また書式(3)に avils が付記された例が2件あるが<sup>(32)</sup>、これは ril と数字だけの事例が100件を超しているので完全な例外であり、

<sup>(28)</sup> Facchetti, p. 275: ci avil xurvar: “tre anni completi”.

<sup>(29)</sup> sval-θas は一般に現在分詞形と把握される (Wylín, p. 171f.) が, 過去分詞と見なす説もある (Facchetti, p. 97).

<sup>(30)</sup> 例えば Lejeune, p. 308ff.: avils cealyls: «30 ans».

<sup>(31)</sup> Steinbauer, p. 461: “volendet, erreicht, gelebt”?

<sup>(32)</sup> この場合—Wylín, p. 179によれば—ril は “all'età di” の意味を持つ付加語。

この書式が書式(1)と同様の意味を表す論拠とはなりえない。

なお *avil* ないし *avils* と数字だけが記されている事例 (例えば *ET*, *Ta* 1.171, *Vt* 1.14) もあるが, *avil* の場合は *svalce* が省略されていて「xx 年間 (生きた)」を意味し, *avils* の場合は *lupu(ce)* が省略されていて「第 xx 年目に (死去)」と捉えられよう。他方, 数字だけを挙げているケースも多少ある (例えば *ET*, *Ta* 1.6:LXXXVIII) が, これがどの書式に属するのは決定できない。いずれにせよ書式 (1) (2) (3) の表現上の差異は明確であり, 従ってその内容にも原則的な相違が看取されるが, 実際問題としてこの原則がどこまで厳格に守られたかは確認しようがない。

ともあれ上の考察により, *ciš šariš* が序数で「13 番目」を意味することが立証され, それに基づいて *huθzar* は「40」を意味し, *avils huθzars* は「40 番目の年に」即ち「満 39 歳で」と解釈されるのである。

## II. 1～6 以外の数詞を巡る諸問題

次に 7, 8, 9 を表す単語について検討する。semφ, cezp, nurφ がそれぞれこれら 3 数のどれかを表していることは確実である。ただしこれらの単語はいずれも上記の形では実証されず, semφ は接尾辞 -s の付いた semφ-s と, 十の位の数を示す -alχ が付いた semφ-alχ- という形, cezp も接尾辞 -z の付いた cezp-z と, cezp-alχ- という形で現れており, 他方 nurφ は nurφ-zi だけが知られており, -alχ が付いた形は実証されていない。semφ, cezp, nurφ はこのような証拠から析出された単語であるが, いずれも p ないし φ で終わる 1 つのグループを形成しており, *šar* が「10」を意味するので, 「10」ではありえない。また -alχ が付いた形: semφalχ と cezp-alχ は (実証されていない \*nurφalχ をも含めて) それぞれ「70」か「80」か「90」のどれかを表している。

これらの単語がどの数に該当するのかについては諸説があり, それぞれの数値を特定するため, しばしば語源的解明法が用いられた。例えば semφ はラテン語の *septem* 「7」と, nurφ はラテン語の *novem* 「9」と語形が似ているとして 7 もしくは 9 と同定された<sup>(33)</sup>。しかしながら, 近親関係あるいは借用関係が実証されていない言語の単語と単に語形が似ているからと言って, 同じ意味を持つと断定することはできない。semφ は例えばセム系諸語 (ウガリット語 *šb(t)*, ヘブル語 *šeba'*, アラビア語の *sab'a*, アラム語 *šibā'* 等<sup>(34)</sup>) と語形

<sup>(33)</sup> semφ については, 例えば Goldmann, I, p. 80f., nurφ については, 例えば Steinbauer, p. 450. Trombetti, p. 42 は印欧語, 南カフカズ語, セム語等との対応を主張する。

<sup>(34)</sup> E. Lepiński, *Semitic Languages. Outline of a Comparative Grammar*<sup>2</sup>, Leuven 2001, p. 290f.

が類似しているが、エトルスキ語はセム系言語にも、むしろ印欧語族にも属していない。あるいはまた、 $nur\varphi$  の語幹として  $*nur\theta$  を想定し、これをエトルスキの女神名 *Nortia Decuma* から「10」と同定する試みもあった<sup>(35)</sup>。だが *Nortia Decuma* は「10番目の *Nortia*」という意味であって、*Nortia* 自体が「10」を表すわけではない。一般的には  $sem\varphi$ ,  $cez\varphi$ ,  $nur\varphi$  の順で7, 8, 9に該当すると見なされている<sup>(36)</sup>が、大抵の場合その論拠は明示されおらず、上記のような類似性に誘発されたと思われる。いずれにせよこれらの単語の同定は、語源的方法に依拠することは避けねばならない。以下で我々はコンビナトリ解明法により大胆な推理を交えつつ、問題の解決を試みようと思う。

さて、問題の3つの単語にはある特徴的な違いが認められる。それは死亡年齢を掲示するエトルスキ語碑文における3者の使用頻度である。即ち  $nur\varphi$  については、十の位の数を表す接尾辞  $-al\chi$  を伴った推定形  $*nur\varphi al\chi$  を用いて死亡年齢を掲示している墓碑銘は皆無であるが、これに対し  $sem\varphi$  と  $cez\varphi$  については、 $sem\varphi al\chi$  と  $cez\varphi al\chi$  を用いて享年を掲示している碑文は、前者は1篇、後者は3篇ある。一方、数字によって死亡年齢を掲示している墓碑銘は、(-emによる引き算形を考慮に入れて)これらの単語が用いられるはずの67から76歳までの年齢と77から86歳までの年齢に関しては、前者が6篇、後者が4編ある<sup>(37)</sup>が、87~96歳について例証は1篇しかなく、これはエトルスキ人の平均寿命(ざっと40歳と算定される)<sup>(38)</sup>から判断して、87~96歳の死者が殆どいなかったためであると解釈するのが適切である(もっとも100歳代の死者がいたことを示す碑銘文が2件あるが)。ここから帰結されるのは、 $sem\varphi al\chi$  と  $cez\varphi al\chi$  が「70」と「80」のどちらかを表し(文字による実証例が少なすぎて決定はできないけれども)、 $*nur\varphi al\chi$  が——文字による年齢掲示が全く実証されていない限りにおいて——「90」を表す可能性が高いということである(「90」は  $-al\chi$  に依らない語形をもっていたという想定も可能であるが、それに該当するような単語は検出できない)。以上の推論に間違いがなければ、 $nur\varphi$  は「9」を、 $sem\varphi$  と  $cez\varphi$  はそれぞれ「7」か「8」のどちらかを意味するということになる。

ところで  $sem\varphi$ ,  $cez\varphi$ ,  $nur\varphi$  がいずれも  $p/\varphi$  で終わるグループ「7~9群」を形成しているとすれば、1~6の数詞が別のグループ「1~6群」を成し、このグループの最後の数詞  $\sigma a$  (=6)

<sup>(35)</sup> P.S. Cortsen, Die etruskische Standes- und Beamtentitel, durch die Inschriften beleuchtet, *Det Kgl. Danske Videnskabernes Selskab. Historisk-filologiske Meddelelser*, XI, 1 (1925), p. 139f.

<sup>(36)</sup> 例えば Hrkal, p. 7; Sloty, p. 396ff.; Pfiffig, *ES*, p. 124; Pallottino, *Etruscologia*, p. 487; Briquel, p. 45; Facchetti, p. 78, 113, 104, 109, 113, 288; Rix, p. 961 (疑問符付きで)等。これに対し Stoltenberg, *Sachen*, p. 20ff.:  $cez\varphi$ ,  $sem\varphi$ ,  $nur\varphi$ ; Steinbauer, p. 100f. は  $cez\varphi$ ,  $nur\varphi$ ,  $sem\varphi$  の順とし、Vetter, p. 135 は  $cez\varphi=7$  を主張する。

<sup>(37)</sup> M. Pallottino (ed.), *Thesaurus Linguae Etruscae*, I, *Indice lessicale*, Roma 1978, p. 375.

<sup>(38)</sup> J. Heurgon, *La vie quotidienne des Étrusques*, Paris 1961, p. 44f.



は「1~6群」の最後であるとともに「7~9群」への分岐点を成すと捉えられよう。もしも先に推定したように、 $\sigma eal\chi$  (=60) は  $\sigma a$  の母音が  $e$  に変えられて形成されたのであれば、 $sem\phi al\chi$  の  $se-$  も—語頭の子音 ( $s$  と  $\sigma$ ) は異なるけれども— $\sigma a$  に由来した可能性が出てくるであろう。その場合、エンクリティクな接尾辞  $-m$  は一般に「そして、さらに」を意味するので、ここから「超える」の意味を想定できれば、 $se-m-\phi$  は分岐点たる  $\sigma a=6$  を「超える」最初の数詞「7」を ( $sem\phi al\chi$  は「70」を) 表すと把握できるであろう。

以上の検討によって、もし  $sem\phi=7$  および  $nur\phi=9$  が成り立つとすれば、最後に残った  $cezp$  は必然的に「8」を表すことになり、 $sem\phi$  を 7 と同定したのと同じような形態分析によって、 $cezp$  の数値を 8 に同定することが可能である。先に考察したように、 $\sigma eal\chi$  の  $\sigma e$  が  $\sigma a$  から、また  $muval\chi$  の  $mu(v)-$  が  $ma-\chi$  から派生したのであれば、 $cezp$  の  $ce$  は  $ci$  から派生した蓋然性が認められる。この場合  $cezp$  の  $ce$  は  $ciz$  からの派生形と捉えられ、この  $ciz$  は「第3の、3番目 (の)」を意味する  $cis$  の変異形と把握されよう。語尾の  $-p$  ( $\phi$ ) は 7, 8, 9 を表す数詞に共通する接尾辞なので、 $cezp$  は 7 を超える 3 番目の数を表すであろう。では何から 3 番目なのか。前述のとおり  $\sigma a$  (=6) は「1~6群」の最後であるとともにこれを超える数への分岐点でもある。とすれば  $cezp$  はこの  $\sigma a$  から数えて「3番目」の数である「8」を ( $cezp$  は「80」を) 表すということになる。

しかも  $cezp=8$  を傍証するような古注が存在する。即ち、エトルスキ語の単語 *Xosfer* は *October* を意味すると伝える中世の注釈 (*TLE* 858 : *Xosfer Tuscorum lingua October mensis dicitur*)<sup>(39)</sup> があり、そしてこの *Xosf-er* と *Octo-ber* (*octo-* は 8 を意味する) との照合に基づいて  $cezp$  を「8」と同定する説が提唱されてきた<sup>(40)</sup>。これに対して Lejeune (in : Heems, p. 308f.) は、*Hyttenia* の *hytt-* とエトルスキ語の *huθ* との類似性からこれを 4 と同定した語源説と同次元で論じつつ、*Xosfer* と  $cezp$  の比較は大まか過ぎて説得力がないと主張した。しかし彼は *Hyttenia* に関する伝承と *Xosfer* のそれとの間には根本的な違いがあることを見逃している。即ち前者は *Hyttenia* とエトルスキ語との関係には全然言及していないのに対し、後者は *Xosfer* がエトルスキ語で *October* を意味すると明言している点である。そうである以上、 $\chi osfer$  と  $cezp$  とが音声的に照合するかどうか、改めて検討しない訳にはいかないであろう。

*Xosfer* が *October* を意味すると伝える件の古注は 3 篇あるが、そのうち 8 世紀に編纂さ

<sup>(39)</sup> M. Pallottino (ed.), *Testimonia Linguae Etruscae*, Firenze<sup>2</sup> 1968. 同注 : 「*Xosfer* は \**chosfer* と読まれるべきである。」

<sup>(40)</sup> Sloty, p. 396f. ; E. Fiesel, *Bemerkungen und Berechtigungen*, in : *Studi Etruschi*, X (1936), p. 324f. ; Facchetti, p. 101, 113, 266 等。

れた Liber Glossarum が最も古く<sup>(41)</sup>、他の2篇はそれ以降のものであり、これらが伝える語形  $\chi offer$  および  $\chi ofer$  は、伝承の途中で  $\chi osfer$  がより簡単な形に誤記されたと考えられる。この Liber Glossarum は7世紀前半の Isidorus の著作に依拠しているが、エトルスキ語自体はこれよりずっと600年前にもはや話されなくなっているのです。彼が利用できたのはこの言語に関して恐らく断片的に伝えられた写本であろう。とはいえ、写本によって伝承されてきたエトルスキ語の単語がかなり正確に書き写されたことは、Liber Glossarum で伝えられた月名と、それと対比できる実証されているエトルスキ語の3つの月名とがほぼ一致することから明白である：

Aclus (=Iunius mensis) (TLE 801) —エトルスキ語: *acale* (ET, LL VI 14)

Aclus の -us はラテン語の語尾で、*acale* は \**acle* の古形。

Ampiles (=Maius mensis) (TLE 805) —エトルスキ語: *anpilie* (ET, TC 18)

*anpilie* は *ampilie* の誤記と見られる。

Celius (=September mensis) (TLE 824) —エトルスキ語: *celi* (ET, LL VIII 3)

以上の対応から  $\chi osfer$  も一応正確に伝えられた可能性がある。ただしこの月名には——エトルスキ語では1つの例外を除いて母音 [o] は一般に使用されていないので——伝承の途中で誤記があったに相違ない。しかしそれを証明する資料がない以上、もともと  $\chi osfer$  と表記されたと仮定して、それが実際に *cezp* と音声的に符合するかどうかを吟味しなければならぬであろう。もし符合すれば、*cezp* は「8」を表すことになる。

さて  $\chi osfer$  にも原形となったエトルスキ語があったと仮定すれば、母音 [o] を欠くエトルスキ語ではこのラテン語形に直接対応する単語は存在しない。 $\chi osfer$  の基になりうるような原形は \* $\chi usfer$  であろうが、 $\chi usf-$ (あるいはまた  $\chi usp-$ ) は— $\chi$  の代わりに気音を伴わない *c* (=k) を用いた \**cusf-*(あるいはまた *cusp-*) も一実証されていない。他にも様々な復元形 (*cespre*,  $\chi espre$ , *cesfre*,  $\chi esfre$  \**cezp*?, \* $\chi esfer$  等)<sup>(42)</sup> が提案されたが、現存する資料中には、一応似ているエトルスキ語の語幹としては *cezp* しか見当たらない。ここで留意すべきは、 $\chi osfer$  はローマ人がエトルスキ人の発音を聴きとってラテン語式に書き表した単語であり、エトルスキ語で *cezp* と表記された単語を転写したものではないことである。*cezp* は正書法による表記であって、その実際の発音は時期や地域あるいは個人によって多かれ少なかれ異なっただろう——換言すれば、*cezp* とは若干違った発音もありえた。これらのことを念頭におきながら、*cezp* がはたしてローマ人によって  $\chi osf-er$  と表記され

<sup>(41)</sup> *Kleine Pauly*, 2, München 1979, Sp. 820.

<sup>(42)</sup> Fiesel, p. 324f.; Pfiffig, *ES*, p. 127; Facchetti, p. 266.



えたかどうかを検討しよう。

cezp の冒頭の子音 c は  $\chi$ osfer では  $\chi$  (=ch) となっているが、エトルスキ語では普通は c と  $\chi$  は弁別される（例えば動詞の語尾 -ce は能動態過去, - $\chi$ e は受動態過去を表す）。しかしラテン語には無気音と帯気音の区別はなく、このようなラテン語を話すローマ人が、強く発音された [k] を表すために  $\chi$  を用いた可能性は排除されない。エトルスキ語自体において両者が区別されずに用いられる事例もあり（例えば  $\text{se}\chi$  と  $\text{sec}$  「娘」等）、ローマ人が cezp の c を  $\chi$  と表記しても怪しむに足りない。

cezp の母音 e は  $\chi$ osfer では o と表記されているが、もしこれが伝承の途中における誤記でなかったとすれば、[e] と発音されたものを o と表記したと考えられる。というのは、エトルスキ語の e はラテン語で o と転写されるケースがあり（例えばエトルスキ語  $\text{velimna}$  はラテン語では  $\text{Volumnius}$  に、 $\text{velzna}$  は  $\text{Volsinii}$  になる—ただしこの変化は一般的には -l の前で起きる）、 $\chi$ osfer においてもこのような慣例に従い、e が o という形で伝えられた可能性があるから。あるいはひょっとして [œ] に近く発音された [e] ないし [ɛ] を o と表記したのかもしれない。

cezp の第 2 の子音 z は  $\chi$ osfer では s となっている。これはエトルスキ語では無声音で [ts] と発音されるが、ラテン語では有声音の [dz] である。従って原音が無声音であることを示すため z ではなく s の文字を当てたと解釈できよう。実際エトルスキ語の人名  $\text{mezenties}$  はラテン語では一般的に  $\text{Mezentius}$  と表記されるが、この他に  $\text{Messentius}$ ,  $\text{Mesentius}$  という表記も伝えられている（Cf. 平田『国制』p. 114）。従って  $\chi$ osfer の s と cezp の z との間に対応を認めても差し支えなからう。

最後に cezp の末尾の子音 p は  $\chi$ osfer では f となっており<sup>(43)</sup>、それが実際に f と表記されたかどうか問題となる。「7-9 群」に属する  $\text{sem}\varphi$  と  $\text{nur}\varphi$  の末尾の子音がいずれも  $\varphi$  であるので、cezp のそれも元来は  $\varphi$  (=ph) だったと推論できる。エトルスキ語では、 $\varphi$ =ph は気音が落ちて p に推移する傾向があり、さらに f になる場合もあるので、cezp の p は最初の推移の結果と捉えても支障はないであろう。 $\chi$ osfer の f は ph が f のように聞こえたか、あるいは実際にそう発音されたのを書きとめたものと考えられる。

以上の検証により  $\chi$ osf は、もし誤記でなかったとすれば、cezp の実際の発音を基にこう表記されたということになる。従って cezp が「8」を表す公算は大であり、その初期の

<sup>(43)</sup> この f をオスキ・ウンブリ語の影響と見なす説がある（Cf. G. Breyer, *Etruskisches Sprachgut im Lateinischen unter Ausschluss des spezifisch onomastischen Bereiches*, Leuven 1993, p. 75, n. 251）。しかし  $\chi$ osf-er はエトルスキ語そのものではなく、ローマ人が聴いて書きとめたエトルスキ語なので、この f の発音がエトルスキ語自体の発音に直接由来したのかどうかは不明であり、ここにオスキ・ウンブリ語の影響を想定するのは無意味である。

語形は \*cezφ と措定される。他方 χosfer の語幹は紛れもなく χosf- であって χos- ではない。従ってこの単語を χos-fer と分析し、-fer が -ber の形でラテン語に借用され、September, October, November, December の語尾となったという見解は排斥される<sup>(44)</sup>。

このように cezp=8 が成り立つとすれば、cezp と Cispius という丘の名称との類似性(Varro によれば Cispius の古い呼称は Cespius である<sup>(45)</sup>) は注目に値する。何故なら、Festus が Septimontium で供犠が行われた「7つの丘」 septem montes<sup>(46)</sup> の8番目の丘として、以下に引用する通り Cispius に言及しているからである。7つではなく8つの丘(ないし場所)の名前が挙げられているその記事については、その信憑性を疑う説や、どれか一つ丘を減らすとか二つの丘を一まとめにするとかして全部で7つになるようにする説、あるいはまた時期によって丘の数が違ったと主張する説が提唱される一方で、cezp は、Cispius との類似性から8と同定される(Sloty, p. 397)か、この丘を7番目の丘として、7と見なされた(Stoltenberg, *Sachen*, p. 20)。以上の諸説に対し我々は cezp=8 を前提とした場合、Festus の記事はどう読めるかを考察しつつ、新たな仮説を提示したいと思う。

① Festus, 458L : < **Septimontium** …… ap>pellatur mense < Decembri .. post eum, qui dicitur in > Fastis Agonalia, < quod eo die in septem m>ontibus fiunt sa<crificia : Palatio, Velia, F>agutali, Subura, < Cermalo, Caelio, Oppio > et Cispio.

② Festus, 459L : **Septimontium** appellabant diem festem, quod in septem locis faciebant sacrificium : Palatio, Velia, Fagutali[a], Subura, Cermalo, Caelio, Oppio et Cispio.

③ Festus, 474, 476L : **Septimontio**, ut ait Antistius Labeo, hisce montibus feriae : Palatio, cui sacrificium quod fit, Palatuar dicitur ; Veliae, cui item sacrificium ; Fagu<t>ali, Suburae, Cermalo, Oppio, Caelio monti, Cispio monti. Oppius autem appellatus est, ut ait Varro rerum humanarum lib. VIII., ab Opitre Oppio Tusculano, qui cum praesidio Tusculanorum missus ad Romam tuendam, dum Tullus Hostilius Veios oppugnaret, consederat in Carinis, et ibi castra habuerat. Similiter Cispium a Laevo Cispio Anagnino, qui eiusdem rei causa eam partem Esquiliarum, quae iacet ad vicum Patricium versus, in qua regione est aedis Mefitis, tuitus est.

以下でこれらの記事を我々なりに読み解くが、そのさいローマ市内、特にこれらの丘ないし場所における最初期の考古学的遺物、遺構や遺跡の解釈<sup>(47)</sup> は差し控え、原文の構造

<sup>(44)</sup> この問題については Breyer, p. 74ff. 参照。

<sup>(45)</sup> *ll.*, V 50 : Esquiliae duo montes habiti, quod pars <Oppius pars> Cespius mons suo antiquo nomine etiam nunc in sacris appellatur.

<sup>(46)</sup> Cf. Varro, *ll.*, VII. 41 : Ubi nunc est Roma, Septimontium nominatum ab tot montibus quos postea urbs muris comprehendit.

<sup>(47)</sup> 最近の研究書として F. Fulminante, *The Urbanisation of Rome and Latium Vetus From the Bronze Age to*

や文脈を分析して問題にアプローチする。というのも、初期ローマの歴史的発展は montes だけでなく colles をも含めて総合的に考察しなければならないが、Septimontium は Varro<sup>(48)</sup> によれば、montani「丘 (montes) の住民」だけの祭儀であり Festus が言及しているのは montes に関してのみであるから。

さて①によれば Septimontium と称されるのは、Fasti『暦』の中で12月に Agonalia と呼ばれる日の翌日に7つの丘 (septem montibus)、即ち Palatium, Velia, Fagutal, Subura, Cermalus, Caelius, Oppius そして Cispius で供儀が行われたからである。②は①の Paulus による要約であり、祭日が Septimontium と呼ばれたのは「7つの場所で」(septem locis) 供儀が行われたからで、その7つの場所として①と全く同じ地名が同じ順に列挙される。①と②で注目されるのは、Oppius までは接続詞 et「そして」なしに地名が7つの丘ないし場所として列挙された後に、8番目に Cispius の名が挙げられ、その前でだけ et が用いられていることである。この et は単に列挙した名称の最後だから用いられたのではなく、③における monti の用法(後述)を顧慮すれば、Cispius を他の丘と区別する役割を果たしていると思われる。そこから読み取れるのは、もともとは Oppius までの7つの丘ないし場所で Septimontium『七丘祭日』に祭儀が行われ、後にこの祭儀が Cispius でも行われたということである。であるならば Cispius は本来 Septimontium には関与しなかった8番目の丘ということになる。

一方③では、供儀が行われた丘として Palatium, Velia, Fagutal, Subura, Caelius, Cermalus, Oppium を挙げた後に、Caelius と Cispius それぞれに「丘」(monti) を添えて言及し、それから Oppium と Cispius の名前の由来に触れ、mons Cispius は Laevus Cispius Anagninus に因んで命名された、と伝えている。注目すべきことに、列挙された7つの名前の7番目に Caelius だけが monti と付記され、その後に Cispius がまさに8番目に monti「丘」と明記されて挙示されている。従って cezp=8 を前提とすれば、cezp と Cispius とは著しい照合を示している。

このような照合から判断して、mons Cispius の原義が「8番目の丘」だったと推定しても構わないだろう。そうであるならば、何故その丘にエトルスキ語 cezp に由来する地名が用いられたのが問題となる。Festus (Varro を典拠とする)によれば、Oppius の丘がそう呼ばれるのは、Tullus Hostilius がウェーと戦った時に Opiter Oppius Tusculanus がトゥ

*the Archaic Era*, Cambridge 2014; A. Carandini, *Die Geburt Roms*, Düsseldorf/Zürich 2002 (= *La nascita di Roma*, Torino 1997) だけを挙げておく。

<sup>(48)</sup> *l.l.*, VI 24: Dies Septimontium nominatus ab his septem montibus, in quis sita Urbs est; feriae non populi, sed montanorum modo, ut Paganalibus, qui sunt alicuius pagi.

スクルム人の守備隊とともにローマを防衛するため派遣され、Carinaeに陣を取りそこを根城としたからであり、同様に Cispius の丘という呼称は、同じ理由から「パトリキー街」の方に向かって横たわる Esquiliae の一部で Mefitis の神殿があった地区を防衛の拠点とした Laevus Cispius Anagninus に由来する、という。Oppius 丘の名前の由来はさておき、Cispius 丘の場合、フェストゥスの説明は信頼できるであろうか。

Cispius という人名は共和政末期になって実証される平民の氏族名であり、共和政初期の Fasti (コンスル名簿) には記載されておらず、この時期に、従ってまた王政期(フェストゥスによればトゥルス・ホステリウスの治世)に、この氏族がローマに存在したかどうか大いに疑問である。Septimontium 祭はホステリウス王の治世に始まったのではなく、数十年前のロムルス時代から行われていたに違いない(7つの丘の冒頭に Palatium が挙げられているのはその証左である)ので、もしホステリウス王の治世に『七丘祭』が問題になるとすれば、この祭りへの参加者が本来の7つの丘だけでなく、Cispius の丘まで訪れるようになったということであろう。Laevus Cispius がローマの防衛のために立てこもったのは、Esquiliae の一部で Mefitis の神殿がある地区とされるが、ここでも Septimontium の祭儀が行われるようになって、Esquiliae の一部であったこの特定の地区に新たに呼称が必要になり、「8番目の丘」として Cispius mons と命名したということは十分ありそうなことである。従って Cispius mons は、王政期におけるその歴史的事実性が疑われる人物の名前に由来するのではなく、「8番目の丘」という意味で命名されたと考える方が理にかなっている。Cispius の由来を人名に帰したのは、Varro が活躍していた前1世紀にこの地名と同じ名前を持つ人物が生存したからだと推定される。

では、ローマの丘の呼称がエトルスキ語に由来するという事例は、ありえたのだろうか。伝承史料ならびに考古学的史料は、かかる事例がありえたことを示唆している。即ち、エトルスキの研究者でもあったローマ皇帝クラウディウスは、次のように伝えている——エトルリア出身の Caele Vibenna は、後にローマの王 Servius Tullius になった Mastarna の戦友であり、軍隊を率いてローマの丘を占領し、そのためこの丘は Caele に因んでラテン語で Caelius の丘と呼ばれるようになったと。他方ラテン語 Caele Vibenna はエトルスキ語銘文の Caile Vipinas に相当し、この名前はヴルチの『フランソワの墓』の壁画の中で macstrna=Mastarna とともに言及されており、クラウディウス帝の証言と一致する<sup>(49)</sup>。Mastarna は——私見では——ローマを占領した後その王権を掌握して Servius Tullius と改名し、

<sup>(49)</sup> 平田隆一「アテネ僭主政とローマ後期王政(その3)——セルウィウス・トゥリウス王の出自・即位・王権の性格」『国際文化研究科論集』(東北大学)第4号(1996), p.1-16.

絶大な権力を行使して改革を断行して都市国家としてのローマの国制を確立した<sup>(50)</sup>。絶対的権力者たるセルウィウス王が、かつての戦友 *Caile=Caelius* が占拠した丘を *Caelius* 丘と名付け、その名がそのまま後世に踏襲されたとしても不思議ではない。とはいえ、この丘では以前から *Septimontium* の供犠が行われていたので、セルウィウス時代に丘にまだ名前が付いていなかったはずはない。この点を顧慮すれば、その丘はセルウィウス王が初めて命名したのではなく、この王によって改名されたと考定しなければならないであろう。

*Cispius mons* の場合はどうであろうか。Sloty (p. 396f.) によれば、*Cispius* 丘の麓にある *Subura* にエトルスキ街があって、エトルスキが「彼らの」丘を 8 番目の丘と命名したという。しかしこの説明は、*Festus* による *Septimontium* の解説および *Cispius* という呼称の由来とは異なっており、また当時の歴史的状況の把握が不十分である。*Cispius* なる人物がホステリウス王時代に実在してこの王と親密な関係にあったという証拠はないので、*Festus* の言うように、仮にキスピウスがオッピウスと同様にトウスクルム人の守備隊とともにローマに派遣され防衛に当たったとしても、それだけの理由で王が新たな地名を公認しその徹底を図ったと考えるのは無理である。ホステリウス王にはそれを成し遂げる程の、セルウィウス王に匹敵するような強力な権力はなかったであろう。しかもホステリウス時代には、ローマに移住したエトルスキ人は——いたとしても——それほど多くはなく、ローマの祭儀に参加して 8 番目の丘にエトルスキ語起源の名前を付けるだけの勢力はまだ具備していなかったと思われる。これが可能になるのはタルクイニウス・プリスクスの時代であり、渡来しローマに帰化したエトルスキ人は相当数おり、*Subura* を含む *Septimontium* の丘に居住した者もいたに違いない。その限り彼らは *Varro* のいう *montani* に該当し、かかるものとして *Septimontium* の祭儀に参加するようになったであろう。そして彼らの参加によってエスクイリアエの丘の特定の部分も供犠のため訪れるべき場所となったので、この区域を「8 番目」の丘としてエトルスキ語の「8」に因んで *Cispius* という仮称で呼んだと考えられる。従って *Cispius* はローマ在住のエトルスキ人全員から「彼らの」丘と見なされたはずはなく、実際ここには（何時からかは不明だが）イタリキ系の神 *Mefitis*<sup>(51)</sup> の神殿があった。ともあれ *Cispius* という仮称は、恐らくセルウィウス・トゥリウス王による国制確立とともに、公式の名称となったと推定される。

<sup>(50)</sup> 平田隆一「アテネ僭主政とローマ後期王政（その 4）—セルウィウス・トゥリウス王政の構造」『国際文化研究』（東北大学）第 3 号（1996），p. 71-85.

<sup>(51)</sup> G. Radke, *Die Götter Altitaliens*, Münster 1979, p. 211f.

## 小括

以上の考察の主な結果をまとめて小稿の結びとする。

- ① サイコロ A および B の各面に彫られた 1~6 を表す各単語の文字は、常に左向きに、反転することなく連続的に記された。これらの単語の配列と対応する数列は次の通りである。

A : θu, zal, ci, maχ, σα, huθ — 1, 2, 3, 5, 6, 4

B : θu, zal, ci, huθ, maχ, σα — 1, 2, 3, 4, 5, 6

サイコロの作成者は、A と B における各単語の文字が上か下かに向かう方向をそれぞれ一か所だけ変えて、上記の順列を唯一の書き順とした。A は一回限りで伝統的な書き方を基にしており、B は 1~6 の自然数列を連続して書くことができる新式の書き方である。この異なる書き方の併用によって両者間の基本的な違い—現世と来世—を示唆しようとした。

- ② A と B それぞれにおける対面同士の数の組み合わせは両者とも : 1 : 4, 2 : 5, 3 : 6  
この同じ組み合わせによって、サイコロの作成者は両者の共通性を示し、現世と来世が連続していることを示唆しようとした。

数詞は次のような順列を成す :

- ③ 1 から 10 まで : θu, zal, ci, huθ, maχ, σα, semφ, cezp, nurφ, śar  
④ 十の位 (20, 30, .....90) : zaθrum, cealχ, huθzar, muvalχ, σεalχ, semφalχ, cezpalχ, \*nurφalχ

なお本小論作成に当たり Briquel 教授から貴重な情報を頂いた。感謝申し上げたい。

